

研 究 分 野	資源評価	部名	漁業開発部
研 究 課 題 名	日本周辺高度回遊性魚類資源調査		
予 算 区 分	独法委託		
試験研究実施年度・研究期間	H.13 ~ H.17		
担 当	植村 康		
協力・分担関係	遠洋水研		

〈目的〉 日本が国際機関の高度回遊性魚類の保存・管理に協力し、当該資源の安定的な利用のため、資源の科学的データを完備するための調査の一環である。独立行政法人水産総合研究センターが都道府県、大学、民間団体に委託する調査の一部である。青森県のマグロ類、サメ類の漁獲関連データ集計・解析を行うものである。

〈試験研究方法〉 調査市場のマグロ類、サメ類の水揚伝票から調査項目を抽出して取りまとめた。

調査項目：漁獲月日、漁獲重量、規格

調査市場：マグロ類

日本海沿岸：①岩崎、②深浦

津軽海峡沿岸：③三厩、④大間

太平洋沿岸：⑤尻労、⑥六ヶ所海水、⑦八戸みなと漁協・八戸魚市場

サメ類

太平洋沿岸：①八戸みなと漁協・八戸魚市場

調査時期：平成15年1月から6月までのデータを平成15年7月に現地調査して、取りまとめ、データ取りまとめ機関の日本 uns にデータを報告した。同様に平成15年7月から12月を平成16年1月に取りまとめ報告した。

〈結果の概要・要約〉

- ・ 青森県で漁獲されるマグロ類の殆どがクロマグロで体重20kg.以上をマグロ、以下をメジと呼称する地区が多い。
- ・ クロマグロは青森県全域で釣り（一本釣り、曳釣、延縄）及び定置網（大型、小型）で漁獲され、地域で重要な魚種となっている。
- ・ 釣りが行われているのは日本海及び津軽海峡沿岸である。
- ・ マグロ類は他にビンチョウ、メカジキ、キハダが漁獲された。
- ・ サメ類はアブラツノザメ、ネズミザメ、ホシザメが漁獲され、漁法は底曳網であった。

〈主要成果の具体的なデータ〉

- ・ クロマグロは7市場で16,640尾の体重データを取りまとめた。7市場漁獲量356トンの100%にあたる。
- ・ 7市場のクロマグロは356トンで前年の209トンを大幅に上回った。深浦、岩崎の大型定置網に6～8月に大量入網したことが大きい。日本海沿岸の漁獲量は175トンで前年の25トンから大幅に増加し、1992年の調査開始以来最も多い漁獲量であった。

- ・ 大間は体重 100kg 以上個体の漁獲量が 95%を占めており、釣りで漁獲していた。
- ・ クロマグロ漁獲量の順位は大間 109 トン、深浦 96 トン、岩崎 78 トン、三厩 39 トン、尻労 29 トンであった。
- ・ クロマグロ漁獲尾数の順位は深浦 6,666 尾、岩崎 5,934 尾、尻労 1,777 尾、三厩 1,171 尾、大間 677 尾であった。
- ・ クロマグロ体長（尾叉長）測定は深浦、三厩、大間の 3 地区で行い、それぞれ 179、899、143 尾の計 1,221 尾の体長・体重データが得られた。
- ・ 年令別平均体重から推定した年令による体重分けでは、クロマグロ漁獲量は 2 令と 9 令以上の 2 つの山がみられた。漁獲尾数は 2 令以下が 80%を占め、4 令以下で 94%であり、成熟年令の 5 令になる前に殆どが漁獲されている。
- ・ クロマグロは 5 月から 12 月が主要な水揚げの時期であった。定置網漁業は 5,7,8 月に、釣りは 9 ～12 月に漁獲が集中していた。
- ・ アブラツノザメは箱入れ尾数から 51,823 尾の体重を推定した。これは該漁獲量 150 トンの 66.5%にあたる。アブラツノザメの漁期は 10 月から翌年 6 月であった。
- ・ アブラツノザメの漁獲量は 150 トンと前年の 338 トンから半減した。
- ・ サメ類は他にネズミザメ 3 トン、ホシザメ 4 トンの漁獲があった。

#### 〈今後の問題点〉

- ・ クロマグロの年令組成を正確にするため、体長測定数・市場を増やすことが必要である。
- ・ 委託先の遠洋水研の要求データのみでなく、青森県で必要なデータについて検討し、収集解析を行い、青森県のクロマグロ漁業者により有効な調査にしていく必要がある。

#### 〈次年度の具体的計画〉

平成 15 年度と同様の内容であるが委託先の遠洋水研の要請により 3 ヶ月毎の調査を基本とする。国際会議での最新データ利用のためである。

#### 〈結果の発表・活用状況等〉

- ・ 平成 16 年 2 月に日本周辺高度回遊性魚類資源調査委託事業報告会で発表した。
- ・ 平成 15 年度報告書は平成 16 年 3 月付けで日本 uns で印刷予定である。

